

神美民話 【秋葉明神の靈験】

香住の通称秋葉山と呼んでいる三開山麓の人家に近い丘に、古くから秋葉明神が祭られていたが、明治の末期祭祀に不便というので足仲彦命を祭神とする氏神香住神社のこもり堂内に遷座してお祭りをしていた。その頃日露戦争がぼっ発し、村人は毎晩隣保交代で戦勝祈願のおこもりをしていた頃の事である。

私の母方の祖父にあたる栄木源治郎は、自分の所在地に奉祀されていた秋葉明神が、氏神様の籠り堂に移されたので心寂しい日を送っていた。

明治38年の春、近所の新築建前の手伝いに行き、棟上げの祝酒にめいいてして帰宅し、作業着のまま帯も解かず寝てしまったが、夢の中に衣冠束帯を着けた神々しい白髪の人老が枕辺に立ち「わしは秋葉明神ぢや、望みもせぬ籠り堂などに移されて甚だ不満ぢや、早く適当な場所に祭ってくれ」といって消えてしまわれた。

夢うつつの中に聞いてまどろんでいるとき、にわかにパチパチと異様な物音に跳び起き外に出て見ると、氏神様の森が真っ赤に燃えているので「お宮が火事だ火事だ」と叫びつつ、真先に駆けつけて見ると、戦勝祈願のおこもりの人達のたき火の不始末からかこもり堂が火を吹いているが不思議にも火は横に広がらず、まっすぐ天窓を抜いて火炎をあげている。祖父は、堂中に秋葉明神のお厨子があることに気づき、火中に飛び込んで御無事なお厨子を外に運び出し、ホッと一息入れている頃、急を聞いて駆け集まった村人達が100メートル程下方の谷水や井戸水を手桶でリレーして半焼程度で消火することができた。後で祖父の夢物語を聞いた人々は神意の勿体なきに恐懼して早速境内に末社として奉祀している若一王子明神、山口大神と共に一字の中に合祀して、毎年四月十八日を例祭日とし部落消防団の防火訓練を行って今日に至っているが、神慮の有難さと申すべきか明治初年以來、二〜三回の小火を除いて火災の発生を見ず、秋葉明神の靈験を称えている。田中信夫記「豊岡民話 耳ぶくろ(昭和50年発行)」より



香住秋葉神社祭(四月十八日)